セッション

ウッドデザイン賞が拓く新価値創造と新たなビジネス

木づかいの新たな胎動を感じさせた「ウッドデザイン賞２０１６」。審査委員会においても各分野で活発な議論が行われました。ウッドデザイン賞２０１６の傾向と評価を総括し、ウッドデザインが暮らしや社会にいかなる価値をもたらし、どのような市場を拓くのか、について語っていただいた、審査委員の方々のセッションをまとめました。

モデレーター：末吉里花氏
パネラー　：赤池 学氏
益田文和氏
手塚由比氏
山崎 亮氏
伊香賀俊治氏

末吉　第２回のウッドデザイン賞２０１６も大変多くのユニークで新しい木を使った作品が寄せられたわけですが、まず今年の審査を終えての感想、印象を教えていただけますか。

赤池　全体を見渡して感じたことは、各作品のクオリティは間違いなく上がっているということです。これは第１回で「ただ木を使っている」だけの工務店の取組、製品や玩具を厳しく審査してきたことも関係していると思います。先ほど受賞者の方と話をしていたのですが、第１回で落選してしまい、〝このレベルでは通らないんだ〟と感じて、新たにチャレンジされたとお聞きしました。その真剣さが伝わってくる内容が多かったと思います。さらに、地域や専門家を巻き込んだ、コミュニティ単位での取組も印象に残っています。

赤池 学氏

益田　巷には、数多くのデザイン賞が存在しています。対象や領域にそれぞれ違いはありますが、昨年ウッドデザイン賞が創設され、審査委員を拝命したとき、この賞は何を特徴にして差別化や個性化を図るべきなのか、をずっと考えていました。単なる木製品や木造建築を評価する賞ではない、ということだけは共有されていましたが、第２回を迎えてウッドデザイン賞の目指すべきところがより明確になってきたと感じています。今年は提案性や社会性がはっきりしていて、かつデザインとして見たときにとても面白いものが多かった。この賞は今後ますます面白くなっていくだろう、と期待が膨らんでいます。

手塚　昨年は幅広いジャンルから非常に多くの応募がありましたが、今年はウッドデザイン賞の方向性が見えてきて、高レベルの戦いになったと感じました。審査をするなかで嬉しかった点は、すべての人が木ときちんと向き合い、木で社会や暮らしをいかに良くしていくかを真摯に考えているということが伝わってきたことです。その分、取組も多岐にわたっていると思いました。

山崎　昨年も同じこの場所で、「良い取組でも、表現されているものがダサいとダメ」とコメントしました。良いことが、美しい、面白い、かわいい、おいしいなど感性の部分とセットになっていることが大切ということです。その点、今年の応募作品は理性と感性のバランスが良くなったと思います。その分、審査に迷ったということもありましたが。

伊香賀　あえて言わせていただくと、技術研究の視点から評価すると提案内容の詰めの部分では、昨年の方がよかったと思います。ただ、その中にあっていくつか示唆に富む作品も見られました。最優秀賞に選ばれた木製自動車はその典型的な例です。クルマづくりに木を使うという意外性を超えて、木の持つ質感や肌触りなど、本来多くの場面で木が使われてきた住宅分野などにおいて、木の登場場面を忘れてしまっているのでは、ということを思い起こさせてくれました。技術研究ではこうした意欲的な提案がもっと出てきて欲しいと思っています。

益田文和氏

末吉　私は今年、初めて審査に参加させていただき、貴重な体験でした。木を使った消費者目線の製品がこれほどあるとは、素晴らしいことだと思いました。その一方で、実際は買ったり、触れたり、使ったりといったアクセスポイントがまだ多くないと感じましたので、これだけのものがあるなら入手できる場所がさらに広がっていくとよいと思いました。では次に、ご自身の担当分野で印象に残った作品があれば教えていただけますでしょうか。特に消費者視点、木づかいの新規性から見た評価のポイントをお話いただけますか。

赤池　ハートフルデザイン部門で優秀賞を受賞した、「日本橋とやま館」は空間づくりのコンセプトが優れていると思います。居心地のよい木の空間で地元のおいしい素材やお酒が飲めますし、実際に

手塚由比氏

売上実績も上げています。地域の魅力と木の空間が高次元でマッチしており、素晴らしい成果につながった好例です。ソーシャルデザイン部門・コミュニケーション分野で受賞された「ヤブクグリ」は木の弁当箱だけではなく、その中身も一緒に考えている点がポイントです。林業と食の世界を掛け算する取組であり、地域の6次産業化のモデルとして評価できます。こうしたモデルが今後もどんどん出てきて欲しいですし、それが生活者に身近になるということであると思います。

益田　木製品分野では、「kids furniture」など家具を国産材でつくる難しさをデザイン的にうまくクリアしているものがありました。「iLignosシステム手帳」は素材開発という点で面白い取組です。柔軟性に富む、非常に滑らかな木の素材で触っていて不思議な感覚を覚えます。素材としての可能性が拓かれれば、木の活用はより広がる、そんな期待を抱かせてくれました。地域材活用の点で言えば「信州型 木製遮音壁」が印象に残りました。その土地の木で遮音壁をつくれば道や山の風景も変わり、地域の経済的効果も生み出せます。

手塚　私の担当は建築・空間分野ですので、その中では「新柏クリニック」が印象に残りました。透析治療の施設を木造にしたもので、患者のベッドから木の構造が見える、優しい空間になっています。」昨年、私も沖縄で不妊治療クリニックを木造でつくりました。医療施設は医療の技術ばかりが注目されがちですが、患者の過ごす空間は心のケアにとても重要な役割を担っており、そのデザインは治療行為にとって重要だと思っています。同様に「産学官連携　病院木質化プロジェクト」は建物の構造全体は無理だとしても、内装に木を使おうという意欲的な取組です。建築家として東日本大震災の津波で立ち枯れした巨大な杉並木を使った「あさひ幼稚園」を手掛けました。完成した時に思ったことは、木目ひとつにも生きている証があるということ。人間は木を使う生活がＤＮＡに組み込まれているのではないか、と感じます。当たり前に木を使うという、当たり前のことがもっと広まり、社会がさらによくなっていく。そのひとつの例を見た気がしました。

山﨑 亮氏

山崎　先ほど良いことをやっていても伝え方がうまくなければ人々の心に入っていかない、という話をしましたが、その面で言えば、笑いも含めて「ハコダケ君」は面白い。北海道の森林現状を訴え、木材利用の啓発を促すメッセージを訴えることを役目としているキャラクターです。突っ込まれることを前提にしているところがいい（笑）。「地域産業×創造性教育プログラム ロボット動物園」は、ＩＴとロボット、地域材を組み合わせたワークショップですが、これも印象に残りました。今の時代、学校教育の中でやらなければならないテーマは数多くあり、森林や木材だけをテーマにして学習時間を確保することはなかなか難しい。その点、この取組はロボットを動かすためのプログラミング教育と木や自然素材を使ったロボット作りをうまく組み合わせている。教育ツールの開発にはこうしたアプローチが有効です。

伊香賀　全般的には、今まで木を使ってこなかった分野に取組む姿勢が見られておりよかったと思います。コミュニケーション分野の「大工と組む わが家再生」は寒い、暗い、段差がある、といった古民家のネガティブな要素をクリアし、断熱対策もしっかり施しながら地域材を使って質の高い住宅を提供しています。特筆すべきは、一連の活動の中に顧客の声を拾い上げる取組が盛り込まれている点です。改修前後でどのようによくなったか、という視点がしっかり組み込まれている点は、調査研究として見ても素晴らしいと思いました。「平成28年熊本地震における木造応急仮設住宅の供給」も同様で、私も応急仮設住宅の入居者の方々の生の声を聞きましたが、実際に木造住宅に住んでみてどうだったかを知ることは重要です。例えば小学校の校舎の建て替えの際、仮設の木造校舎で子どもたちが1年間を過ごした後では、新しい鉄筋コンクリートの校舎に入りたいとは言わないかもしれません。こうしたエビデンスをしっかり収集・分析することが重要です。

末吉　では最後に、木材に関わる多様な関係者へのメッセージをお願いします。

赤池　成功の鍵は、域外を超えた協業をしながら商品や商流をつくっていくことだろうと思います。熊本の応急仮設は住宅メーカーのノウハウを地域へ注ぎ込みながら、地場の工務店主導でつくられたことがポイントです。協業のビジネスモデルを地域や川上・川中・川下で築き上げることが重要です。もうひとつ、最優秀賞を受賞された「SETSUNA」のトヨタ自動車さんが、「木の門外漢である私たちの取組を評価してもらったことに感謝します」と話されていましたが、これまで木を使っていない業種・業態・カテゴリの参画が木材利用の促進には欠かせないと思っています。例えば医療器具や点滴台、車椅子などコ・メディカルと呼ばれる領域でも木材はもっと使えるはずです。門外漢にこそ、もっと木材を使ってもらうことを期待したいと思います。

伊香賀俊治氏

益田　私はタイの出張から帰ってきたところなのですが、現地で「日本に資源は何もない」と話していたばかりです。ほとんどの資源を輸入に頼るなかで、この国にあるものは唯一、森林資源と言っても過言ではない。この国はすべてを森林資源に頼ってものをつくってきた歴史を持っています。私たちはその事実をいつの間にか忘れてしまったのではないでしょうか。デザインの観点で言えば、国産材をベースにしていかに新しい素材づくりに挑むかが重要でしょう。私の事務所では今、インドネシアの技術と組んで竹の自転車をつくっています。ウッドデザイン賞が木という素材に向き合い、技術を磨き、デザインの質を上げながら、さらなる高みを目指してチャレンジを続けるための「拠り所」となることを願っています。

手塚　建築の世界では木を使う難しさ、例えば防腐や耐火といったさまざまな条件が存在していることも確かで、まだどこにでも木を使えるという状況にはなっていません。木を使って素晴らしい建築物をつくっていくためには、法整備も重要です。木は建築家の目から見ても、優れた素材であり、魅力的な素材です。暮らしや身の回りの空間を見渡して「ここに木を使っていたらもっと居心地の良い空間になるだろうな」と思える場所がたくさんあるはずです。木を使って空間や街が住みやすくなるための新しい提案を今後も期待しています。

末吉里花氏

山崎　近年、行動経済学が注目されデザイン分野にも影響を与えているように思えます。行動経済学には、「システム1」「システム2」という人間の認知や判断に関する分類があります。我々がある物を目の当たりにした時、かわいい、かっこいい、おしゃれ、など何の学習もなしに、突発的に表出してくるものがシステム1。論理的に正しいとか、社会的な価値があるなど、ある程度の知識に裏打

ちされて判断されるものがシステム2です。木材利用に関してはこれまでその重要性をシステム2で訴えてきた感があります。一方、他の素材でできた商品はかっこいい、おしゃれといったシステム1で訴えて成功している。今、必要なことは、システム1でいかに訴えるかを考えることです。そこを入り口にして、システム2へ思いを巡らせてもらうきっかけをつくる。ウッドデザイン賞はそのためにできた賞だと思っています。システム1でいかに表現できるか、をより深く考えて欲しい。それは皆さんが自社の商品を世に問うときも同様なのです。

伊香賀　システム1で攻めることも戦略ですが、研究者の立場から言えばエビデンスも必要です。かっこいいやかわいいという感覚をどの程度の規模の人が感じるのか、なぜ木を使った空間を人は快適だと感じるのか、客観的なデータの裏付けがあるとその製品なり空間の説得力がさらに増します。次回以降のウッドデザイン賞では、技術研究分野以外の分野でもエビデンスによる実証の視点から評価していくことが大切だと思っています。

末吉　ウッドデザイン賞に選ばれた作品は、その背景に素晴らしいストーリーを持っているものが多いと感じました。私たち生活者は、素敵だ、かっこいいと思った商品の背景にあるストーリーを知った時に、さらに心が動くのではないでしょうか。是非、これからもそのストーリーを積み上げていただきたいと思いますし、それを伝えて欲しいと願っています。その結果として、木でつくられた素晴らしいものたちに囲まれた暮らしが実現すれば、私たちの心もより豊かになるのではないか、と感じています。本日は、大変参考になるお話をありがとうございました。

ウッドデザイン賞 2016

最優秀賞（農林水産大臣賞）

優秀賞（林野庁長官賞）

奨励賞（審査委員長賞）